文人旗本三橋成烈の女訓書『童女教訓松間鄙言』（下）

簑田将樹

キーワード：近世古典学、東西交流、女子教育

三　注釈（承前）

十一　払底な物は歌によむ恋ひ

一六下　**払底な**　ほとんどない。稀有な。

〃　**歌は、よむことの難きにあらず、心を歌になすことのかたきなり**　『八雲御抄』巻六・用意部に「歌をよむがかたきにあらず、よくよむがかたきなり」。『初学和歌式』（元禄九年刊版本）巻五・和歌執行の事に「古人の詞に「歌は、よむことのかたきにはあらず、よくよむことのかたき也」と云々」。

〃　**おきもせずねもせで夜半を明かしては**　『古今集』巻十三・恋三に「起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮しつ」（業平、『伊勢物語』二段にも所収）。

〃　**その時、その心になりて沈吟し、凡骨をはなれてよめ**　『定家卿相語』冒頭条に「恋の歌をよむには、凡骨の身を捨てゝ、業平のふるまひけむ事を思ひいでゝ、我身をみな業平になしてよむ」。

〃　**待つ宵の侍従**　小侍従（生没未詳）。平安時代末期の歌人。『平家物語』巻五・月見に「待宵の小侍従といふ女房も、此御所にぞ候ける。この女房を「待宵」と申ける事は、或時、御所にて、「まつよひ、帰るあした、いづれかあはれはまされる」と御尋ありければ、「待よひのふけゆく鐘の声きけばかへるあしたの鳥はものかは」とよみたりけるによつてこそ、「待宵」とは召されけれ」。

〃　**ふし柴の加賀**　待賢門院加賀（生没未詳）。平安時代末期の歌人。『古今著聞集』巻五・待賢門院の女房加賀伏柴の秀歌を詠む事に「待賢門院の女房に、加賀といふ歌よみありけり。「かねてより思しことよふし柴のこるばかりなるなげきせんとは」といふ歌を、とし比よみて持たるを（略）花園のおとゞに（略）まいらせたりければ、おとゞいみじくあはれにおぼしけり。さて、かひ〴〵しく『千載集』に入にけり。世の人、「ふししばの加賀」とぞいひける」。

〃　**感情**　心に染み入る趣。しみじみとした思いに至らせる力。『初学考鑑』二十二条に「その味をよく〳〵がてんして歌をよまば、感情

深き歌も出来べし」。『烏丸光栄卿口授』九十一条に「心の優美なる事、誠に感情深き事、能々味はふべし」。

〃 **大内**　内裏。禁中。『日本書紀』（慶長十五年跋刊版本）巻十四・雄略天皇二十三年に「勅して内裏に喚す」、同巻二十一・用明天皇二年に「内裏に入る」。

〃 **玉垂れの隙**　玉で作った簾のすきま。『雪玉集』巻八・七百首題内七十首・冬七首に「つつめどもうき名をぞ思ふ玉だれのひまもとめくる風をみるにも」。

〃 **暗部の山にやどりを需め**　『源氏物語』若紫巻に「くらぶの山に宿りも取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましう、中々なり」。

〃 **関こえがたき逢坂**　『後撰集』巻十一・恋三に「人知れぬ身はいそげども年をへてなど越えがたき相坂の関」（伊尹、『歌枕名寄』巻二十二・東山部一・近江国一・会坂篇にも所収）。

〃 **にやけたること**　男が色恋で落ち着かない素振りを見せること。浮ついていること。

〃 **腹中大きなるならはしなれば**　心のうちをやすやすと表には出さないのが常だから。思いを秘めて暮らすのが一般的なので。注一四下「腹のふくれをやすむる」参照。

〃 **紫縮緬の鉢巻きに、脇息のいる病人**　恋しく思う相手との関係に悩み苦しんだり、嘆き惑ったりする人。恋煩いする人。

〃 **深閨に、人知らぬ人**　家の中で大切に育てられ、めったに外へ出ない人。箱入り娘。

〃 **北斗に近き所**　新吉原の遊郭を指す。江戸城から見て北の方角にあたることによる。『柳多留』五篇に「おやぢまだ西より北へ行気也」。

〃 **天上より落つるの、美人**　遊女を指す。『唐詩選』巻六・五言絶句・洛陽の李少将と同じく永楽公主の蕃に入るを観るに「辺地、鶯花少し。年来れども未だ新たなるを覚えず。美人、天上より落つ。竜塞、始めて春なるべし」（孫逖）。

一七上　**浩然の気を養ふ**　のびのびとした心持ちになる。解放感を味わう。『孟子』公孫丑上篇に見える言い廻し。『東海道名所記』巻六・山科より京まかり宇治までに「茶の湯は、賢人悟道の上のたのしみとして、趙州、これをもてあそび、見性の心地をきはめ、盧同は、これに経をあらはして、浩然の気をやしなひけり」。『風俗文選』旅賦并引に「馬士、駕籠舁は、軽重に日月を送り、一盃の酒に浩然の気をやしなふ」（許六）。

〃 **磯城嶋の道**　歌道。やまとうたの教え。「磯城嶋」の表記は、『日本書紀』欽明天皇元年に「都を倭の国の磯城郡の磯城嶋に遷す」。

〃 **松の操をあらはし**　「松」は、季節が変わっても色をあらためないことから、古来、不変や貞潔の象徴。集雲止水の随筆『十枝松之記』（正徳三年成、『張州雑志』巻九十三所収）に「松は、君子の徳をあらはすとかや。ひじりのこと葉にも「歳寒して、しぼむにおくるゝ」（『論語』子罕篇による）とぞいふめるは、露霜にも色をあらためず、みさほなるをいふにこそ。常盤木も多かめれど、ことさらにいふめるは、其徳、衆木に秀でたれば成べし」。『百人一首改観抄』巻上に、中納言行平の和歌「立わかれいなばの山の峯におふるまつとしきか

ば今帰りこん」の注として、「「いなばの山」といふより「峯におふる松」とつゞけて、その名に「待」をかねて、松のときはなるごとく、貞潔にして我を待とだにきかば、今やがて帰りきてあはんずるぞ」。また、「松」と「操」とを詠み合わせる例として、『卑懐集』春に「色ふかくさく藤浪の埋木にくちせぬ松の操をぞ見る」。

〃　**なよ竹の一節、二節のいたづらぶし**　恋い慕う人と離れている間の、空しい独り寝。「なよ竹」で「一節、二節」を、「節」で寝床に横たわる意の「伏し」を、導く。また、「節」と「夜」とを掛ける。『古今著聞集』巻八・後嵯峨天皇某少将の妻を召す事幷に鳴門中将の事に「たかしとてなに、かはせんなよ竹の一夜二夜のあだのふしをば」。『広沢輯藻』春歌に「一夜だに花にやどりはなよ竹のいたづらぶしと鳥や鳴くらむ」。

〃　**父母のゆるしなくては、男とものいふべきにあらず**　当時の女子教育の一つ。『女大学宝箱』三条に「「女は、父母の命と媒妁とに非ざれば、交らず親ず」と、『小学』にも見えたり。仮令命を失ふとも、心を金石のごとくに堅して、義を守るべし」。

〃　**歌よむ人は、見ぬ境にも心到り……詞をつづくる**　諺。『九州の道の記』（『扶桑拾葉集』巻二十九上所収）に「まことに「歌人はゆかずして名所をしる」と、ことわざにいへるがごとく」。『毛吹草』巻二・世話付古語に「ふるきをたづねてあたらしきをしる／歌人はゐながらめいしよをしる」。

〃　**人ならばうき名や立たん小夜更けて我が手枕に通ふ梅がか**　出典未詳。和歌は『醒睡笑』巻一・鈍副子に「人ならば憂名やたゝむさよふけて我手枕にかよふ梅がゝ」（作者名表記なし）。また、『近代和歌一人一首』に和歌同文、作者名「伊達政宗母」。『一人一首』に第三句「夜な〳〵に」、作者名「松平越後守娘伊達遠江守宗利室」。『若むらさき』に第三句「宵々に」、作者名「伊達宗利妻」。さらに、太田道灌の家集とされる『慕景集』に類歌「人ならばうき名やたたむ手枕に夜な夜なかよふ梅の匂ひは」。

十二　珍布くなくとも女は女風

一七下　**法師は弓を射、馬を乗り……きそくする**　『徒然草』八十段に「人ごとに、我身に疎きことをのみぞ好むめる。法師は兵の道を立て、夷は弓引くすべ知らず、仏法知たる気色し、連歌し、管弦を嗜みあへり。されど、疎かなるをのれが道よりは、猶人には思ひ侮られぬべし」。

〃　**蕎麦切りも、醤油汁で喰ふては負けに成り**　通常とは違うことを好み。『根無草後編』跋に「山鳥の尾の長々しき河漏麪の淡薄をめで、隼人の薩摩なる、金粟酒の酷烈をもてはやすこそは、風流のしわざなるべき」。一般的な食べ方としては、『和漢三才図会』巻百五・造醸類に「蕎麦切（略）醤油の汁を用ひ之れを食す。山葵、菜菔等の葷く辛き物を和して可なり」。

〃　**堅魚も、芥子酢は止めにして、蘿蔔おろしを尋ね**　前項に同じ。『鶉衣前篇』百魚譜に「鰹は芥子鮓（ママ）の風味、上戸は千金にかえむとも思ふらむを、鎌倉の海の素性を兼好にいひさがされたる（『徒然草』百十九段による）、いと口おし」。

〃　**羽子板にも、どんどや左義長をやめにする**　これも、新奇なものを悦ぶ趣向の一つ。「どんど」「左義長」は、正月に行われる火の祭。『和漢三才図会』巻四・時候類に「止牟止（とんど）　正字、未だ詳しからず。俗に「左義長」と謂ふ」。図版は、同書に見える「止牟止」の挿絵（国文学研究資料館蔵本による）と『江都二色』に見える「羽子板」の挿絵（国立国会図書館蔵稀書複製会本による）。

〃　**町人は肩衣を着て歩行きたがり**　肩衣は武家の礼服で、出仕時に着る。

〃　**諸士いの御うちかた様の前帯びする**　帯の結び目を前方に置くもので、女郎などが多く用いる。『色道大鏡』巻三・寛文式上に「禿成長して禿のかはり出、其者引こむ日より、髪の中じめを改めて嶋田わげに結かふる法なり。おなじく後帯をかへて前帯に改む。されども、俄に前帯するは、すしにみゆる物なれば、帯は後帯もよし」。

〃　**遊女は、「木地を見せる」とて素顔を重にし**　『色道大鏡』巻三・寛文式上に「傾城の顔に化粧する事、これを制する也。（略）傾城といふは、禿立より朝夕五体をみがきあげて、繕なき顔を本とす。道に長ぜる人は、傾城の色くろきとてきらはず。色くろき女郎は、くろきまゝにてをくべし。是、生れつきにて、ぶたしなみといはず」。『猪の文章』に「昔は、翠黛紅粉より後腰ののし付迄を、気をつくしたるをぞ、「傾城風」といひしに、今は、其風は町方にうつりければ、かへつて「初心めける」とて、素顔に素足、後皺も改ず、万繕（よろづつくろひ）なきを「里の色」とさだむ」。『用捨箱』巻中・六条に「元文の初の頃より、貴賤共に頬紅を止て白粉ばかりを薄くぬり、或、白粉をぬらぬもあり。「何故如此（しか）するぞ」と人に問たれば、「遊女の粧ひを似するなり」といふとあれば、当時（このころ）の遊女の素顔をだてとしたるより此事の絶たるなるべし」。

〃　**仕官へする女は白粉をするをもて礼義祝儀とせし**　『祝の書』女房の服の部に見える「本まゆの図并三所わけめ、びんのかみ」（国立国会図書館蔵写本による）。図中に「ひたゐは、うはばきのおしろい、一段しろ〳〵と、こくする也。まゆはきといふ、ふとき筆にて、はきちらす也」とあり、白粉の使用が前提となっている。

〃　**脂粉の却つて顔色をけがすをきらふ**　『古今詩刪』（寛保三年刊和刻本）巻二十二・集霊台に「虢国夫人、主恩を承け、平明、馬に騎して宮門に入る。却て脂粉を顔色を汚すと嫌ひ、淡（うす）く蛾眉を掃きて至尊に朝す」（張祜、『唐詩選』巻七・七言絶句にも所収、題「虢夫人」）。

『唐詩選国字解』に「却て（略）至尊に朝す」の注として「女は脂粉を以て装ふものなれども、この美人は気量がすぐれたゆへに、化粧などをすることが嫌いで、ただざつと眉も薄化粧をして、天子「至尊」に朝せられたが、いよいよ風流で顔色がうるわしかつた」。

〃 **湯化粧**　入浴後に白粉や頬紅を付けて、顔色を麗しく見せる行為。

一八上　**傾城のまねを素人のする……口おしき次第**　当時、武家知識人の間にあった不満。『政談』巻一に「遊女、河原者、平人に混ずるよりして、遊女、野郎の風俗、平人に移り、当時は大名、高位の詞遣ひにも此五、六十年以前と替り、傾城町、野郎町の詞を遠慮なく使ひ、武家の妻、娘も傾城、野郎の真似をして恥といふ事をしらず。「是は当代のはやり事也。不苦事也。是をまねぬは田舎者也」といひ冑（のし）りて、風俗、以の外に悪敷成事、元、種姓を混乱するより起れり」。「傾城」は、太夫、天神などの、上級の遊女。

〃 **昨日は張郎と枕をならべ、今日は李郎と衾を同じうして**　遊女の境涯を表す。『開巻一笑』巻坤・娼妓譜の釈義に「張家李郎（ちやうかりらう）　娼妓の類、今日張郎に事へ、明日李郎に事ふ。定ることなきを云。「張」の字、「李」の字に意なし。「こゝの人」「かしこの人」と云が如し」。「枕」「衾」は、臥具で、共寝に必要なもの。『曽我物語』巻四・母の勘当かうぶる事に「閨の枕も衾もかはらで」。『開巻一笑』巻乾・閨怨歌の釈義に「夜、鴛鴦、衾枕をたづさへて、生が寓に忍びいたる」。

〃 **雪の朝に淡茶を点じ、雨の夕べに香木を闘はしめて**　風流な遊び。

〃 **大津**　東海道の宿場町の一つ。京より東へ三里。『続新斎夜語』巻五・（一農夫の信義公廳を感ぜしむ）その二に「逢坂山を越え、大津の駅にかかりしが」。馬場町（ばばちよう）（通称柴屋町（しばやまち））に遊郭が置かれる（『色道大鏡』巻十二・遊郭図上）。

〃 **伏見**　京より南へ四十六町。夷町（えびすちよう）（通称鐘（しゆ）木町（もくまち））に遊郭が置かれる（『色道大鏡』巻十二・遊郭図上、『山州名跡志』巻十三・紀伊郡）。『続新斎夜語』巻三・伏見の妓女呉竹遊女の趣を知るに「城州伏水は、流石に都遠からずして水の流れ潔く、舟有り橋ありて、往還の便りよければ、行人駱駅として繁栄の地なり」。

〃 **小袖は、黒裏の終丈に羽織りまで着て**　男性風の装いをしての意か。「黒裏の終丈」の「小袖」は、裏地に黒色の布を使った小袖を、身の丈と同寸に裁ったもの。『色道大鏡』巻二・寛文格・遊客行用に「小袖の裏は、茶と黒きに限るべし」。また、羽織の長短については、流行に盛衰があった。『塵塚談』巻上に「羽織長短の事、宝暦四、五年頃は、伊達男は短羽織にて、袖より下はやう〳〵四、五寸もありて、袖ばかりのやうにてありし。明和二、三年の頃、大坂より吉田文三郎、吉田文吉などゝといふ人形遣ひ下り、長羽織を着せしを、皆人笑ひけるが、其時分より段々長くなり、文化七、八年に至り、又も短く成しやうに見ゆ。袖口の太細、帯の広狭も、羽折に准じ、いろ〳〵に変化したり」。『賤のをだ巻』に「羽織も世々に転変したり。（略）羽織も長くなり、やがて対丈位の羽織を著るやうになりたり」。

〃 **あわれなるやうにて……女の歌なればなり**　『古今集』仮名序に「小野小町は（略）哀れなる様にて、強からず。（略）強からぬは、女の歌なればなるべし」。

〃 **和琴は「女の、物和らかに掻きならしたるぞよき」**　『源氏物語』

帚木巻に「よく鳴る和琴を調べと、のへたりける（略）律の調べは、女の、物やはらかに掻き鳴らして（略）よく澄める月におりつきなからず」。

〃　**契短、蹴倒し**　いずれも下級の娼婦。『艶道通鑑』巻五の三に「惣本寺の嶋原、新町、吉原より件のごとく正しからざれば、白人、呂州、茶女、臭屋、間短、蹴倒、夜発まで、おなじ習に移り行」（『猪の文章』にも同文）。『本朝色鑑』契短女に「契短は、四六店付の下品と為るなり。（略）姪事の契情、短きを以ての謂れなれば」。

〃　**男をやりつけ、叱りつくる**　不穏な態度や様子。女性として、あるまじき姿。『女大学宝箱』二条に「心緒無美女は、心騒しく、眼恐しく見出して人を怒り、こと葉訇に物いひ、さがなく口誓て人に先立、（略）みな女の道に違るなり。女は唯和ぎ順ひて、貞信に情深く、静なるを淑とす」。

〃　**両夫三夫にまみゆるも厭はず**　貞心とは無縁の、奔放な生活を送って。身持ちの悪い暮らしぶりにも躊躇いがなく。注六上「貞女、両夫にまみゆることなき」参照。

一八下　**三百目の首代**　首を斬られる代わりに支払う金銭。姦通による死罪の公刑を避けるため、または、本夫からの成敗を免れるため、姦夫が本夫に賠償として支払う。『好色一代男』巻一の三に「はやしに一ばい三百目の借り手形、いかに欲の世中なれば迚、かす人もおとなげなし」。『譬喩尽』に「密男の頸代は、昔からお定り、銀三百目」。

〃　**粟田口の烏の腹へ葬られん**　死罪に問われて刑場に晒される。「粟田口」は、京の東の外れで、東海道への出口にあたる。『一休諸国物語』巻四の十四に「粟田口は、往来出入の道筋なれば」。また、死刑執行の場としても有名。『好色五人女』巻三の五に「亭主聞とがめて、人遣し見けるに、おさん茂右衛門なれば、身うち大勢もよふしてとらへに遣し、其科のがれず、様々のせんぎ極、中の使せし玉といへる女も、同じ道筋にひかれ、粟田口の露草とはなりぬ」。

〃　**心の筋をば……めやすかるべかりける**　『源氏物語』玉鬘巻に「姫君の御学問に、いと用なからん。すべて女は、たてて好める事まうけてしみぬるは、さまよからぬことなり。何事もいとつきなからむは、くちおしからむ。たゞ心の筋を、たゞよはしからず、もてしづめをきて、なだらかならむのみなむ、めやすかるべかりける」。

十三　つらき勤めは大善知識

一八下　**しかるに、我等……前の世の酬ひまで、思ひやる**　謡曲「江口」に「然るに、我等、たま〳〵受けがたき人身を受けたりといへども、罪業深き身と生れ、殊に、ためし少なき河竹の流の女となる、前の世の報まで、思ひやるこそ悲しけれ」。

〃　**一休和尚の筆作**　俗説。『狂雲集』所収の「江口の美人勾欄の曲に題す」をもとに発生流布したらしい。謡曲「江口」は、世阿弥の作。

〃　**一双の玉手も千人の枕と成り、半点朱唇、万客になめかわされて**　遊女の境涯を表す。『円機活法』巻十一・麗門・妓女に「一双の玉手、千人枕し、半点の朱唇、万客嘗む」。『異本洞房語園』巻二に「一双の玉手、千人の枕、半点の朱唇、万客嘗む」。

〃　**ふすぶる**　いじける。すねる。

〃 **肥前の丸山**　長崎の遊女町。丸山町から寄合町にまたがって郭が軒を連ねる（『色道大鏡』巻十三・遊郭図下、『長崎土産』巻一）。『好色一代男』巻八の四に「宿に足をもためず、すぐに丸山にゆきて見るに、女郎屋の有様、聞及びしよりはまさりて、一軒に八、九十人も見せ懸姿、唐人はへだたりて女郎替りけるとかや」。

〃 **越前の三国**　日本海西回り航路の寄港地として栄える。松下と上新町とで揚屋が営業（『色道大鏡』巻十二・遊郭図上）。『風流志道軒伝』巻三に「三国、新方、出雲崎（略）諸国の風流をながめつくせば」。

〃 **流れをたつる者**　遊女として生きる者。『曽我物語』巻五・五郎女に情かけし事に「ながれをたつるあそび者、頼むべきにはあらね共」。『色道大鏡』巻四・寛文式下に「女は五障三従の罪かろからず。況や（傾城は）ながれをたつる女なれば、罪障、須弥よりも高く、生死、蒼海よりふかし」。

〃 **長柄傘**　高貴な人に差しかけるため、柄を長く作った傘。遊女が揚屋との往来にも使用。『色道大鏡』巻四・寛文式下に「傘の事、太夫職、天職、共に長柄たるべし」。『古今吉原大全』巻三・道中揚屋入の事付長柄の傘幷に駒下駄の事に「「道中」といふ事は、女郎、揚や、又は、中の丁へ出るをいふ。（略）雨天の節は、ながへのからかさをさしかけさするなり。長柄は、貴人の道具なれども、「上臈」といへる名称によりて、むかしよりめん許ありし事なり」。

〃 **蜀江の裲襠**　蜀江の錦（中国産の美しい錦）で作った打掛小袖。『色道大鏡』巻三・寛文式上に「傾城のうちかけをする事、時により、事によりて、着すべし。貴人のまへへ出るか、或は、初対面の会に出るか、或は、大よせの座席に至る時などは、さもあらんか」。

〃 **白眼に佗の世上の人を見たる**　冷たい目、気に入らないといった目で、世間の人々（俗物たち）を眺めている。『唐詩選』巻七・七言絶句・盧員外象と崔処士興宗が林亭に過るに「白眼にして他の世上の人を看る」（王維、『安者世鏡』巻地の二十一などにも所収）。「白眼に」は、睨んで。『異素六帖』に「白眼は、にらむ也。色目也」。『好色一代女』巻三の二に「白眼つけて歯切をして」。『華里通商考（異本）』吉原国に「白眼んで毒気を吐く」。

一九上　**ものあらがい**　口答え。言い訳。『源氏物語』椎本巻に「御物あらがひこそ、中々、心おかれ侍りぬべけれ」。

〃 **焔王廳**　閻魔の庁。閻魔大王が死者の生前の行為を審判し、その善悪により今後の身の在り方を裁決するところ。『教訓続下手談義』（宝暦三年刊版本）巻二・苅豆店の馬左衛門親類へ教訓の事に「冥途と申にも閻魔と申公儀有之由に候へば、銭次第にて地獄天堂の差別を取捌被申儀は有間敷候」。『今昔道の栞』（嘉永二年刊版本）巻下に「いたつて愚な人は、いつぞ抜がらに成たら、死んで閻魔の廳へ往て、罪の軽重を業の秤でかけらるゝ時、軽ふて宜らふとの思わく」。

〃 **折らばおちぬべき萩の露、拾はば消へなんとする玉篠のうへの霰**　いずれも、はかなく、たよりないもののたとえ。

〃 **池のうきねの、鴛鴦**　『千載集』巻六・冬に「をしどりのうきねの床やあれぬらんつらゝぬにけり昆陽の池水」（経房）。『草庵集』巻六・冬に「をし鴨のうきねの床の枕より跡よりこほる冬のいけみづ」。

〃 **鹿恋ひ**　上方の遊郭で、太夫、天神に次ぐ格付けの遊女。

〃　**鄽女郎なんどいふもの**　上方の遊郭で、格子の内側から客を招き寄せる下級の遊女。端女郎。

一九下　**浮き舟の……を待ちて、夕昏れごとに身もこがれつつ**　『夫木抄』巻三十五・雑十七に「うきふねのさだめぬ浪のちぎりだになほゆふぐれは身もこがるなり」（為家）。

〃　**心にむすぼほれたる**　憂鬱になっている。気にかかっている。

〃　**木綿襷**　「七野社」を導く。『新古今集』巻十九・神祇歌に「わがたのむ七の社のゆふだすきかけても六の道にかへすな」（慈円、『歌枕名寄』巻二十二・東山部一・近江国一・比叡篇にも所収）。

〃　**七野社**　櫟谷七野神社（現在の京都市上京区社横町）の旧称。主祭神春日明神のほかに伊勢、八幡、賀茂、松尾、平野、稲荷の六社を合わせ祀ることによるという。また、京の北の外れにある七つの野（どこを指すかについては諸説がある）の惣社であるからともいう。『増補再板江都総鹿子名所大全』巻一下・神社類聚下に「所謂「七の」とは、伊勢、八幡、賀茂、平野、松尾、稲荷、春日也。又、内野、北野、平野、萩野、上野、蓮台野、紫野也とも云」。

〃　**郭門の柳**　郭の門口に植えられた柳。

〃　**塵塚山の塵**　『徒然草』七十二段に「多て賤しからぬは、文車の文、塵塚の塵」。

〃　**性空上人の袖をぬらし**　『十訓抄』巻三の十五に「（性空上人）感涙おさへがたくして」。『艶道通鑑』巻二の五に「随喜の泪とゞまらず」。

〃　**西行法師が舌頭を坐断せし**　謡曲「江口」などに見える話。『艶道通鑑』巻二の九に「帰る道すがら、貴覚へて、幾度か泪をも落しけん」。

〃　**善知識**　仏の道に人を導く人。『曽我物語』巻十二・虎いであひ呼び入し事に「前世の宿執にて、善知識となり給ひぬ」。『紹巴抄』巻二十・夢浮橋に「善知識に遇ふて」。『安者世鏡』巻地の三十三に「善智識とは（略）真心に導、正道にすゝましむるものなり」。

十四　記念に残る百とせの艶名

一九下　**奈の位**　太夫。最上位の遊女。『百花評林』太夫に「松の位は、花木の長たり」。

〃　**義のために命を鵝毛の軽きに捨てたる**　『徒然草』九十三段に「一日の命、万金よりも重し。牛の価、鵞毛よりも軽し」。「鵝毛」は、極めて軽いもののたとえ。『白氏文集』（元和四年跋刊和刻本）巻六十六・令公の雪中に贈られ夢得と同に相訪ねざるを訝るに酬ゆに「雪は鵝毛に似て、飛んで散り乱れたり。人は鶴氅を披て、立つて徘徊す」（『和漢朗詠集』巻上・冬、謡曲「鉢木」にも所収）。

〃　**異理和理**　仏の教えに違うことと順うこと。『安者世鏡』外題の角書に「異理／和理」。ここでは、経緯、詳細の意か。

〃　**精好屋**　精好織（絹織物の一種で、多く袴地に用いる）を扱う商人。

二〇上　**千曳きの石の、うごきなき思ひ**　堅い決心。びくともしない気持ち。「千曳きの石」は、千人がかりで引かなければ動かせないような、重い石。「うごきなき」を導く。

〃　**井手の酴醾、枝もたわわに**　はっきりと口には出さないが、堰に咲く山吹の花を沢山。「酴醾」が、くちなし色（濃い黄色）の花を咲かせることから、「口なし」と詠われるのを踏まえた言い廻し。『古

今集』巻十九・雑体・誹諧歌に「山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして」（素性）。『下学集』巻下・草木門に「酴醾（やまぶき）」。

〃 **理を連ぬる中**　互いに恋い慕う間柄。「連理の中」を訓み下していう。『毛吹草』巻二・誹諧恋之詞に「連理の中」。『はなひ草』に「連理の中　恋也」。

〃 **おぼめかして**　はっきりしない言い方をして。あえてぼかした受け答えをして。『源氏物語』夕顔巻に「おぼめかしながら頼みかけきこえたり」。

〃 **仏御前**　『平家物語』の登場人物。白拍子。祇王に代わって平清盛の寵愛を受けるが、後に祇王を追って尼となる。

〃 **萌へ出づるもかるるもおなじ埜辺の艸**　祇王の歌。『平家物語』巻一・祇王に「もえ出るも枯るゝもおなじ野辺の草いづれか秋にあはではつべき」。

〃 **入道相国**　平清盛（一一一八～八一）。平安時代末期の武将。

〃 **屏風の端に張りて**　忘れ形見として。大切な記念の品として。

〃 **目路**　視界。見えるところ。

〃 **浅妻の浅き心**　思慮分別に乏しい心。単純で軽率な気持ち。「浅妻」は、通って来た男が翌朝に帰って行くのを見送る女。同音の「浅き」を導く。

二〇下　**とひもせで……くゆる成るべし**　出典未詳。

〃 **おもて合はすべき義理なく**　顔向けできるようなありさまではなく。あまりにも面目なく。

〃 **秋風立ちしこと**　思いが冷めてしまったこと。恋情が薄らいでしまったこと。「秋風」に、「秋」と「飽き」とを掛ける。『古今集』巻十四・恋歌四に「秋風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかゞとぞ思」（素性）。謡曲「班女」に「風の便と思へども、夏もはや杉の窓の、秋風（あきかぜ）冷かに吹き落ちて団雪（だんせつ）の、扇も雪なれば、名を聞くもすさましくて、秋風（しうふう）怨あり。よしや思へば是もげに逢ふは別なるべし。其報なれば今さら、世をも人をも恨むまじ。唯思はれぬ身の程を、思ひつゞけて独居（ひとりゐ）の、班女が閨ぞさみしき」。『明星抄』巻十六・御法に「秋風に　（略）世間の無常をいへり」。

二一上　**袖に朽ちにし秋の霜**　『新古今集』巻十六・雑上に「浅茅生や袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢を吹く嵐かな」（通光）。

〃 **やさしき**　けなげである。殊勝である。

〃 **濡れ手で粟**　容易く利益を得る。『玉塵抄』巻十七「こゝらに「ぬれ手のあわ」と云は、物のたやすいことに云か」。『後撰夷曲集』巻三・秋歌に「女郎花露へし分ておる人はぬれ手で粟をつかむとぞみる」（重香）。浄瑠璃『ひらがな盛衰記』四段に「内證聞ておいとしいと藁畚（わらふご）叺米（かます）俵。面々に持て出おらは白米一斗五升。大豆八升麥稗小豆。濡手で粟のつかみ取」。

十五　先から先へ心づからの勤め

二一上　**二百十日、八朔をあてに買い込みて待ちぬる**　安く仕入れた穀物を不作時に高く売って利鞘を稼ぐ商法。「二百十日」は、立春から数えて二百十日目にあたる日（七月十七日から八月十一日頃まで）。「八朔」は、八月一日。ともに、天候不順で、荒れやすい。『世間万

病回春』（明和八年刊版本）巻三・疱瘡神評に「世並の相場を聞ては、せつかく米の買置して、二百十日の空を待よりも」。

〃 **寡婦**　『色道大鏡』巻十四・雑女部・寡婦篇に「寡婦とは、やもめ女の事也。主あるにあらず、後家にあらず、不犯の女にあらず。夫より離別したるか、又は、夫をきらひ手をきりてかへりたるか、（略）」。

〃 **洗い粉、白粉に物を入れ**　身なりを整えるための化粧品類を惜しまず。身嗜みのための出費には目をつぶり。「洗い粉」は、顔や髪を洗うのに用いる粉。

〃 **瀧の下の踊り講**　未詳。

〃 **身代不相応の胆の腑**　身分と不釣り合いな野心。身の程を知らない大それた望み。

〃 **匹夫**　身分の低い人。

〃 **大身**　高位高禄の人。

〃 **女は氏なくて玉の輿に乗る**　『毛吹草』巻二・世話付古語に「女は氏なうて玉の輿に乗」。『譬喩尽』に「女は氏なふして玉輿に乗る」。

二一下　**我慢嫉妬の角ふりたて**　他人に寛容な姿勢を失って。攻撃的な態度を示して。「我慢」は、自らを誇って他を侮る意。「嫉妬」は、他を恨んだり憎んだりする意。

〃 **惣領**　家督。家を継ぐ人。

〃 **儲けの君**　嫡男。次に家を継ぐべき人。

〃 **一棒の下に**　迷いから目を醒ますよう促されて。心を入れ替えるよう仕向けられて。もとは、禅僧が弟子を導くために棒で眠りを醒まさせる行為。『世間万病回春』巻二・気常病評に「何やら一喝を下し、喝々としかりつけて、その躰相、さも一棒の下に打殺すべきいきほひ」。

〃 **突き出し**　新艘。新しく勤めに出た遊女。『色道大鏡』巻一・名目抄に「突出（つきだし）。同、新艘の事なり。されども、是は、幼歳より抱へ置て養育せず、禿となりて先輩にもつかへず、十四、五歳、十五、六歳にて其家へ来り、其侭傾城に仕立出すを、「突出し」といへり」。『柳多留』巻二に「突出しは七十五日客が来る」。

〃 **風流士**　男女の機微をよく心得ている武人。訳知りのさむらい。『近代艶隠者』巻一の三に「独の風流（たはれを）男、野分の雫に裳をしほりかね」。

〃 **七重の白妙**　七つ重ねの白い色の衣。

〃 **野上の宿**　美濃国の宿駅。関ケ原と垂井との間に所在。色里として旅人を引き寄せた。『更級日記』に「美濃の国になる境に、墨俣（すのまた）といふ渡りして、野がみといふ所に着きぬ。そこに遊女（あそび）ども出で来て、夜ひとよ、うた〳〵ふにも、足柄なりし思出でられて、あはれに恋しきことかぎりなし」。『六百番歌合』に「一夜かす野上の里の草枕結び捨てける人の契りを」（定家）。『風来六部集』巻下・里のをだ巻評に「古より著しきは、江口、神崎、野上の里、大磯、仮粧坂（けはい）の類、其名残りて今はなし」。

〃 **御油、赤阪**　いずれも三河国の宿駅。東海道五十三次の一つ。『阿房枕言葉』ことゞなるものに「ごゆ、あか坂、おかざき、女郎しゆにも、おたふくありとおかし」。『麓の色』巻一・道里に「今も御油、赤坂は昔の名残ありて、一たび咲きて旅人の貫緡を傾け、「春宵一夜、価四百銭」と歌へども、摧直は二百に輸も可笑（をか）し」。

〃 **関札の泊まり**　大名高家一行の滞在。「関札」は、身分の高い人たちが宿駅に留まる際に、町の出入口や宿の前に、その旨を記して立てた札。

〃 **竪縞の木綿帯び胸高にむすび**　誇らしげな様子で。張り切った立ち姿で。

〃 **実め**　地味。真面目。

〃 **さだめぬ海士の子の**　謡曲「半蔀」に「折々尋ねよるならば、定めぬ海士の此宿の、主を誰と白浪の」。「海士」で「小舟」を導く。

〃 **水馴れ棹みなれぬ**　「水馴れ棹」から同音の「みなれぬ」を導く。『拾遺集』巻十一・恋一に「大井河下す筏の水馴棹見なれぬ人も恋しかりけり」（読人不知、『歌枕名寄』巻二・畿内部二・山城国二・嵯峨篇にも所収）。謡曲「兼平」に「干されぬ袖も水馴棹の、見馴れぬ人なれど」。

〃 **万法唯識**　一切の事象は阿頼耶識（人の心の本体）により生ずるの意。

十六　婿の心に染まる白装束

二二上 **「婚礼に白装束を……果てのつかぬ問答には成りけらし**　『徒然草』二百四十三段の筆法に通う。

〃 **尽未来際を経ても**　未来永劫に。果てしなく。『譬喩尽』に「尽未来際　仏者の語」。

二二上 **人生まれて産屋の式は、みな白装束なり**　出産後の一定期間、産婦と赤子とが、白小袖を着たままで過ごす風習。『邦訳日葡辞書』に「Iro nauoxiuo suru.（色直しをする）着物の色を変える。たとえば、赤子が誕生後二十日か三十日あとにし、結婚する人が二日か三日あとにするように、または、ある死者のために喪に服した人が喪あけにするように、着物の色を変えること。すなわち、これらの人々は、すべて白い着物をぬいで、種々の色のついた着物を着るのである」。『秋の世の友』巻二・章魚と烏賊とに「もろ〳〵の色のこんぼんは、白きを第一とす」。

〃 **九品蓮台**　『曽我物語』巻十二・母二宮ゆきわかれし事に「偕老同穴のちぎり、誠あらば、九品蓮台の上にては、もとのちぎりをうしなはず」。謡曲「柏崎」に「聖衆来迎の雲の上には、九品蓮台の花散りて」。

〃 **二月、八月ははなれ月**　二月と八月との結婚は離縁になりやすいという俗信。「二」の字が上下に、「八」の字が左右に、別れていることによる。

〃 **三月は桜醒め**　三月の結婚は愛情が失われやすいという俗信。桜の花の色が移ろいやすいことによる。

〃 **往亡**　往亡日の略。陰陽道で外出（移転、結婚、元服、建築などを含む）を忌む日。

〃 **申の日**　これも、「申」の音が「去る」に通うことから、結婚に不向きとされる日。

〃 **不成就日**　陰陽道で何事も叶わないとされる日。

〃 **富家の女は嫁し易し……嫁してその姑に孝ありと作りし**　豊かな家に生まれ育った娘と、貧しい家に生まれ育った娘とでは、自ずと

行ないに違いが出る。『白氏文集』巻二・秦中吟十首・議婚に見える言い廻し。『紹巴抄』巻一・箒木に「貧家の女と富める家の女との得失を論ずる也。とめる家のむすめは、嫁聚（かしゅ）などの事、不足ならぬまゝに、はやくことゆけども、つゐにはその夫をかろんずるなり。まづしき家の女は、婚礼などはきつと成がたけれども、事成ぬれば其しうとめなどには孝あると云心なり。是は、はかせの女、貧家なるによりて、いひきかせたるなり。「富める家の女は嫁し易し。嫁すること早ければ其の夫（ふ）を軽んず。貧しき家の女は嫁し難し。嫁すること晩（おそ）ければ姑に孝あり」」。

十七　生々の御袋へ諫言

二三上　**一切の女人をば生々の母と思へ**　『梵網経』巻下・不行放救戒に「一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母なり。我れ生々に之に従つて生を受けずといふことなし。故に六道の衆生は皆我が父母なり」。

〃　**生死流転**　謡曲「春栄」に「生じては死し、死しては生じ、流転に廻ること、生々の親子、皆もつて誰か又自他ならん」。

〃　**癩病婆々**　道端で物もらいをする老女。癩病を患って親族に捨てられたことによる暮らし。『和漢三才図会』巻七・人倫類に「乞食（かつたつき）（略）今、癩病人を以て総て加多井と為す」。『物類称呼』巻一・人倫に「乞食　ものもらい（略）癩病人を「かつたい」といふは（略）」。

〃　**旦那場**　得意先。いつも取り引きをする顔馴染み。

〃　**仏の、衆生を一子とおぼす**　『三帖和讃（浄土和讃）』に「超日月光（てうにちぐわちくわう）この身には念仏三昧おしへしむ十方の如来は衆生を一子のごとく憐念す」。

二三下　**十界**　悟界にあたる仏界、菩薩界、縁覚界、声聞界の四つと、迷界にあたる天上界、人間界、修羅界、畜生界、餓鬼界、地獄界の六つとを合わせていう。

〃　**仏とは桜の華に月夜かな**　其角（一六六一～一七〇七、江戸時代前期の俳人、別号に宝晋斎）の句。『其便』、『其角一周忌』、『五元集』巻元所収。

〃　**望は一夜のへだてにて**　『秋篠月清集』百首愚詠・十題百首・釈教十首に「菩薩」の題で「秋の月もちはひとよのへだてにてかつがつかげぞのこるくまなき」。

〃　**雲の上に匍匐つてゐ給ふ**　『和漢三才図会』巻七・人倫類に見える「天人」の挿絵（国文学研究資料館蔵本による）。

〃　**天人も……挿枝の花凋み、五衰の雲に覆はれて**　謡曲「羽衣」に「涙の露の玉鬘、かざしの花もしを〳〵と、天人の五衰も目のまへに見えてあさましや」。

〃　**居続け**　遊里などに長く留まり、なかなか家に帰らないこと。『好色二代男』巻八の二に「我等は旅のかり枕、十日許の居つゞけ、心もなしといふ所へ、今取出の大臣らしき弐人」。『柳多留』巻二に「居つゞけへなまにんじやくな母の文」。

〃　**「八島」「箙」「清経」「兼平」などの諷ひ**　いずれも、合戦と関わ

る内容で、乱世のさまを描く。

〃　**角あれば牙なく、牙あるものは角なく**　天は二物を与えず。あれもこれも揃っているというわけにはいかない。『譬喩尽』に「角あるものは牙なく、牙あるものは角なし」。

二四上　**「水を飲まん」とよろぼひくれば、水は忽ち火炎となる**　『往生要集』巻上に「適ま清流に望て、走り向ひ、彼に趣けば、大力の鬼有て、杖を以て打。或は変じて火と作る。或は悉く枯れ涸きぬ」。

〃　**懼ろしき事詳かに説かば、聴く人血を吐いて死なん**　『倶舎論』での該当記事は未詳。『顕謗法抄』に「若、仏、此の地獄の苦を具説せ給わば、人、聴て血をはいて死すべき故に、仏、くわしく説給はず、とみへたり」。

〃　**一刹那**　極めて短い時間。『譬喩尽』に「一刹那　梵語也。暫時也」。

〃　**訳合ひ**　事の道理。道筋。

二四下　**仏果菩提**　仏の悟り。善因を修めることによって得られるもの。『譬喩尽』に「仏果菩提　浄土宗廻向の語」。

〃　**にやんにやん**　猫の鳴き声を表す。『誹諧独吟集』巻上に「むし気な子をばよくだひてねよ／にやん〳〵と月に鳴ぬる声はして」（貞徳）。

〃　**わんわん**　犬の鳴き声を表す。虎明本狂言「犬山伏」に「いぬ、わん〳〵といふて、かみつかふとする」。『永代蔵』巻三に「棚にふしたる赤犬、目をさまして、わん〳〵とほへかゝれば」。

その二

二四下　**四十八夜**　浄土宗で催される不断の法会。阿弥陀如来の四十八願に因んで四十八夜の間、念仏を唱える。浄土三部経の講説も行われる。『椀久一世の物語』巻下の一に「寺では四十八夜を申して名に触れ、神前には人の目に立つ石燈籠奇進して」。

〃　**千部**　千部会の略。追善や祈願の法会。同一の経を五百僧または千僧が一部ずつ読む。一僧が千遍読みを行うこともある。『教訓続下手談義』（宝暦三年刊版本）巻二・苅豆店の馬左衛門親類へ教訓の事に「総じて、旦那寺にて、堂供養の千部、四十八夜などと申様なる、法会在之節、罷出、世話やき致候義、堅く御無用に候」。

〃　**得たりやあふ**　勇ましい掛け声。敵の攻撃を「よし来た」と迎え撃つ時や、敵を上手く仕留めた時に発する。謡曲「土蜘蛛」に「化生と見るよりも、〳〵、枕にありし膝丸を、抜き開きちやうと切れば、そむくる所をつゞけざまに、足もためず、薙ぎ伏せつゝ、「得たりやおう」とのゝしる声に、形は消えて失せにけり、〳〵」。

〃　**鐘供養**　新たに鋳た鐘の披露目の場で行なう、突き初めの儀式。道成寺縁起に因んで、女子が突き初め役を任されることが多い。

〃　**小松の重盛風に、今一篇、御諫言申すべし**　謡曲「重盛」を踏まえた言い廻し。平重盛（一一三八～七九、平安時代末期の武将）が、鹿ケ谷事件の際、武装して後白河法皇を攻略しようとする父清盛を、涙ながらに説得する話。「小松の」は、重盛が、六波羅小松に邸を構えて、「小松殿」などと呼ばれたことによる。

〃 **「仏」と申すものは……十万億土の西の方におはしまし**　謡曲「山姥」に「げにや常に承る。西方の浄土は十萬億土とかや」。『一休ばなし』巻三の一に「うたがひもなく新右衛門は、西方十万億土、極楽世界に往生せしめて、九品上刹のうてなにいたらむ事は、たなごゝろをみるがごとし」。『合類大節用集』巻一・乾坤門上に「極楽世界（略）西方十万億土に在り」。

〃 **御寺の御本尊は、その献立て紙なれば**　寺院に置かれている本尊は、食事の献立て紙と同じで、仏の道を知る道標に過ぎないので。「献立て紙」は、食卓に上る料理の順序や内容を予め書き示した紙で、それ自体に特に味わいや有難みがあるわけではない。

〃 **十方無碍の仏様**　仏の光明は、あらゆる方向を隈なく照らし、遮られることがないの意。阿弥陀仏の別号「尽十方無碍光如来」による。

二五上　**同気相求むれば**　気の合う者が互いに寄り集まれば。『周易』（寛永五年刊和刻本）文言篇に「同声、相応じ、同気、相求む」。『一休ばなし』巻二の九に「「同気あいもとむ」なるこゝろざし、いとはづかしく思はれける」。

〃 **此を去ること遠からず**　極楽浄土は遥か彼方にあるけれども、法味観念の上から見れば、この娑婆世界からそう遠くはない。『観無量寿経』に「爾のとき、世尊、韋提希に告げたまはく、「汝、いま知るやいなや、阿弥陀仏、ここを去ること遠からず（去此不遠）、汝、まさに念ひを繋けて、諦かに彼の国を観ずべし。浄業成ぜむものなり」。

〃 **三瀬川**　亡者が冥土に行く時に渡るという川。渡る所が三箇所あり、生前の罪の有無や軽重により、どこを渡るかが決められる。三途の川。「流れ」を導く。『とはずがたり』に「わが袖の涙の海よ三瀬河に流れて通へ影をだに見ん」。

〃 **心の猿**　煩悩。物事にとらわれて落ち着きのないさまを、猿にたとえる。

〃 **「貪慾」「瞋恚」「愚癡」を「三毒」と名付けて**　道心を妨げる三つの病。『宝物集』巻二に「貪瞋痴の三毒の病といふ物有。（略）貪といふは、人の物をほしと思ひ、我物をおしと思ふ也。すべて物をむさぼるを申べき也。（略）瞋といふは、はらだつ事をいふなり。（略）痴と申は、愚痴にして、をろかなるを申なり」。『天水抄』巻一に「皆是、貪慾、瞋恚、愚癡也。是を三毒と云。是、三悪道の種也」。

二五下　**この三つは、心にをいて造る罪なれば**　謡曲「東岸居士」に「貪欲、瞋恚、愚癡は、又、心に於て絶えせず」。

〃 **妄語、綺語……身にて作る罪にして**　謡曲「東岸居士」に「殺生、偸盗、邪婬は、身に於て作る罪なり。妄語、綺語、悪口、両舌は、口にて作る罪なり」。

二六上　**身口意の三業**　『譬喩尽』に「三業とは、身三口四意三、身口意之三とも云。是、十悪也。則殺生、偸盗、邪婬は身に作る罪也。妄語、悪口、綺語、両舌は口に作る罪也。貪欲、瞋恚、愚癡は意に作る罪也。以上十悪といふ、是也云々」。

〃 **大夫桟敷き**　劇場における特別指定席。大尽客が土間を眼下に見下ろせる位置にある。

〃 **追ひ込み**　劇場における自由席。二階桟敷の後方にある。

その三

二六上　**切り落とし**　劇場における大衆席。平土間で、仕切りもなく、大勢の客でごった返す。

〃　**昨日の少年、今日の白頭**　『古今詩刪』（寛保三年刊和刻本）巻二十二・秋思に「琪樹の西風、枕簟の秋。楚雲、湘水、同遊を憶ふ。高歌一曲、明鏡を掩ふ。昨日は少年、今は白頭」（許渾、『唐詩選』巻七・七言絶句にも所収）。『唐詩選国字解』に「昨日（さくじつ）は少年、今は白頭」の注として「昔、少年の時はかうであつたが、今は白頭になつた。このやうに早く年のよるものかと、秋に感じて、愁へに堪へられぬ」。

〃　**蛇爺、猫また婆**　欲張りで執念深い老人、根性の曲がった老女。ともに、年寄りを罵っていう語。

〃　**鳥辺、舟岡の煙りと成る**　この世を去る。死ぬ。『撰集抄』序に「鳥辺、船岡のけぶり」、同巻四の六に「鳥辺、船岡のけぶりとものぼり」。「鳥辺」「舟岡」は、ともに葬送の地。『徒然草』百三十八段に「都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人、二人のみならむや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る数多かる日はあれども、送らぬ日はなし」。『譬喩尽』に「化野（あだしの）の露嵯峨、鳥辺洛東、船岡の煙洛北。みな古歌に出、無常を示す」。「煙り」と詠み合わせるのは和歌の常套。『源氏物語』須磨巻に「鳥辺山もえし煙もまがふやとあまの塩焼くうらみにぞ行く」。『夫木抄』巻三十六・雑十八に「はかなさはふなをか山の夕まぐれしばしもたえぬけぶりにもしれ」（為家）。

二七上　**朝には紅顔有れども、夕べには白骨と成る**　『和漢朗詠集』巻下・無常に「朝（あした）に紅顔あつて世路に誇れども、暮（ゆふべ）に白骨となつて郊原に朽ちぬ」（義孝）。

〃　**千秋萬歳**　物事が末永く続くことを願う祝言。『曽我物語』巻七・勘当ゆるす事に「げに〳〵千秋萬歳とさかふべき子共の門出」。謡曲「春栄」に「重ねて千秋萬歳の、猶悦びの盃の」。『紹巴抄』巻九「玉鬘」に「ことぶき「千秋万歳」といへり」。

〃　**罪障**　成仏の妨げとなる悪い行い。男性よりも女性のそれが深いとされる。『明星抄』巻十四・若菜下に「女は罪障深しとなり。『涅槃経』にも説り。『河海』にみえたり」。

〃　**変成男子**　女が、仏の慈悲により、男としての生を得る意。謡曲「夕顔」に「変成男子の願のままに」。『合類大節用集』巻八上・言辞門に「変成男子（へんじやうなんし）」。

〃　**千とせの末まで**　『拾遺集』巻八・雑上に「音にのみ聞き渡つる住吉の松の千とせを今日見つる哉」（貫之）。『唐詩選』巻二・七言古詩・公子行に「願はくは貞松と作つて、千歳、古（ふ）りん」（劉廷芝）。

〃　**猶春毎に緑のいろをまし給へ**　『古今集』巻一・春上に「常盤なる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり」（宗于）。

〃　**松間**　『金葉集』巻一・春に「松間（の）桜花といへる事をよめる」の題で「春ごとに松の緑に埋もれて風にしられぬはな桜かな」（有仁）。以後、和歌では「松間紅葉」（『千載集』巻五・秋下）、「松間花」（『夫木抄』巻四・春四）など、「松間（の）〇〇」、「松間（の）〇」の形式にあてはめた歌題がしばしば用いられる。また、「松間〇〇」は、漢詩にも見え

る言い廻し。『唐詩選』巻二・七言古詩・下山の歌に「嵩山を下れば、所思多し。佳人を携へて、歩すること遅遅たり。松間の明月、長へに此くの如し。君が再遊、復た何れの時ぞ」（宋之問）。一方、「鄙言」は、肩の凝らない語り。親しみやすく、くだけた話。

（跋）

二七下　**春の夜の闇はあやなし梅の花色こそみえね香やは朧ろに**　『古今集』巻一・春歌上に「春の夜、梅の花を、よめる」の題で「春の夜の闇はあやなし梅花色こそ見えね香やはかくるゝ」（躬恒）。『古今集』の伝本に第五句を「香やは朧ろに」と記すものはなく、作者の号「梅朧舘主人」を導き出すための言い換えであろう。

〃　**恋ひと無常を……その二、その三と、残るところなく**　各章の題目と内容とを織り交ぜて書き綴る。

二八上　**みやづかへのこと繁き**　未詳。

〃　**人をまつ間の折り折りに、鄙しからぬ言の葉を**　作品名「松間鄙言」を忍ばせていう。

〃　**同じ雲井の月を詠る人もがな**　立場や教えを説き示す筋道は違っても、目指すところは変わらない。そういう人がいればいいなあ。

正誤表

※篶田「文人旗本三橋成烈の女訓書『童女教訓松間鄙言』（上）」（『愛知淑徳大学文学部論集』第四十五号、令和二年三月、愛知淑徳大学）所収の本文、および同「文人旗本三橋成烈の女訓書『童女教訓松間鄙言』（中）」（『愛知淑徳大学文学部論集』第四十六号、令和三年三月、愛知淑徳大学）所収の注釈に改訂を加えるべき箇所が見付かったので、以下に示す。

（上）

一二下　薄氷より、堅き　→　薄氷より堅き、

二一上　秋の霜氷の、刃に　→　秋の霜、氷の刃に

二二下　二月八日は　→　二月、八月は

二四下　小松の「重盛」風に　→　小松の重盛風に

二七下　春の夜の閨はあやなし。梅の花、色こそみえね。香りやは朧ろに

→「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそみえね香やは朧ろに」

（中）

一七上　小鍋立て　色恋沙汰。色事にのぼせあがること。小鍋は、通常の鍋よりも、熱くなりやすい。

→　小鍋立て　間男と差し向かいで朝食をとる意。

〔附記〕本稿は、JSPS 科研費 18K12298 および愛知淑徳大学研究助成費 18TT01 の成果の一部です。